

## 小学校英語検定教科書のコロケーション分析 —授業における例文作成のための指標策定—

### Collocation Analysis of Authorized Textbooks for Elementary School English: Identification of Appropriate Instructional Sentences for Class Presentation

佐藤 剛\*・佐藤 李子\*\*・清水 咲良\*\*・瀧本 遥陽\*\*・村木歩乃佳\*\*  
Tsuyoshi SATO\*・Riko SATO\*\*・Sakura SHIMIZU\*\*・Haruhi TAKIMOTO\*\*・Honoka MURAKI\*\*

#### 要 旨

2020年度4月より小学校5・6年生に対して教科としての外国語の指導が開始された。それに伴い、検定教科書を使用した英語授業が行われている。一方で、授業で提示する例文やハンドアウトに使用する英文を児童の興味・関心や実態に応じて教師が自作することも必要となる。本研究は、その際の客観的な指標を策定するために、令和2年度版小学生用英語検定教科書のコロケーション分析を行った。その結果、小学生用の検定教科書においてbe動詞を使用した英文は限定的であり、一般動詞が高頻度で抽出される傾向が示された。一般動詞とその後目的語として使用される名詞とを組み合わせることで幅広い表現を可能にし、これによって児童が言いたい事を表現させることをねらいとしていることが伺える。以上のことから初級学習者である小学生の段階から多様な英文に触れられることが重要であることが示唆された。

キーワード：語彙指導 小学校英語教育 コーパス 教科書分析

#### 1. はじめに

2020年度に完全実施となった新学習指導要領（文部科学省，2017）において、小学校5・6年生に対する教科としての外国語の指導が開始された。また、これまで5・6年生を対象に行われていた外国語活動の指導はその対象を小学校3・4年生に引き下げて実施されることになった。さらに、語彙の指導に関して、小学校4年間に600語から700語を扱い、中学校の3年間では1600語から1800語、高等学校の3年間では1800語から2500語が指導されることが明示されるなど、今後はより小中高が連携した指導の必要性が求められている。しかし、このような大きな変革の中、小学校で英語を指導している教員の中には授業の設計や運営に対して不安を抱えていることが少なくない。松宮（2013）は、小学校5・6年生の学級担任や外国語指導助手等を対象として質問紙調査を実施した結果、

授業不安に関わる因子として、「授業指導不安因子」、「授業設計不安因子」、「英語力不安因子」を特定している。つまり、小学校における英語の指導において、日本人英語教師や外国語指導助手は、どのように授業を設計し、どのように授業を進め、その際にどのような英語を用いればよいのかということに不安を感じていると言い換えることができる。その中でも困難なことのひとつは、ある言語材料を導入する際に提示するモデル文をどのような基準で選択するかである。リスニングやインタビューなどのコミュニケーション活動においては、ほとんどの場合、教科書や付属のCDやデジタル教科書を用いることが多い。一方で新出文型や教科書本文の導入のためのオーラルイントロダクション、やり取りのモデル文を示す際などの導入の段階では、児童の興味・関心を高めることや、理解を深めることを目的として、自身の夏休みの思い出について紹介したり、教科書にあるものだけでなく、それ

\* 弘前大学教育学部  
Department of English Education, Faculty of Education, Hirosaki University  
\*\* 弘前大学教育学部学校教育教員養成課程  
Teacher Training Division, Faculty of Education, Hirosaki University

ぞれの学校独自の行事を付け加えるなど教師が創意工夫をした題材内容が多く用いられることが一般的である。

しかし、導入において児童の興味・関心や身近な内容についての例文を用いることが効果的である一方、その内容とその後扱う教科書の内容との間に大きな乖離があることを避ける必要があることもまた事実である。導入で児童にとって身近で理解しやすい内容を扱い、そこからなだらかに教科書の内容理解や児童のアウトプット活動へと移行することが効果を高める上では必要である。そこで、小学校で使用されている検定教科書の英文をデータソースとしたコーパスを構築し、授業で指導する言語材料のコロケーションを分析することで、それらがどのような単語と共起しているのかを明らかにすることができれば、小学校の英語の授業において、英語の授業設計や英語力に不安を持っている教員が、その文型を導入する際に提示する例文を作成することの一助になるのではないかという着想に至った。

## 2 先行研究

小学校における英語指導の開始以降、授業を担当する教員の中には、どのように授業を行えばよいのか不安を感じている場合があることが報告されている。松宮（2013）は、小学校5・6年生の学級担任や外国語指導助手等を対象とした質問紙調査を実施し、潜在的な不安認識に関する要因を特定するとともに、不安認識を構成する因子相互の因果関係や共変関係を分析・検証した。その結果、授業不安に関わる因子として、有意な因果関係を有する「授業指導不安因子」、「授業設計不安因子」、「英語力不安因子」を特定することができた。「英語力不安因子」は、教員が授業中に用いる英語が正しいものであるかどうかという点に不安を感じていると言い換えることができる。この不安が大きい場合、教師が目前の児童の実態を踏まえて、教科書にはないオリジナルの英文を作成・提示しようと考えても、表現したい内容をうまく英語にすることができなかつたり、自作した英文の正確さに疑問が残ることなどから、児童の実態にそぐわないと感じつつも教科書の英文をそのまま用いる授業に終始してしまうことにつながりかねない。教師が例文を自作したり、教科書の英文をアレンジして使用する際に、何らかの指標となるものを作成することで小学校教師の英語の授業を行う際に感じる不安の軽減につながる可能性が

ある。

そのような指標作成のひとつの基準となるものがコロケーション分析である。鎌倉（2015）によると、コロケーションは「ことばの結びつき」であると説明している。ことばの据わりが良い組み合わせがコロケーションに関係していると言える。この知識は、話す・書くといった能動的な技能だけでなく、聞く・読むといった受動的な技能でも活用できる。コロケーションを知ることで、ある単語や句に続く言葉のある程度予測することができる。聞くこと・読むことにおいてもその予測は大きな助けになるだろうと予想されている。このようにコロケーションの知識は四技能全てにおいて上達のカギと成りうると主張されている。鎌倉（2015）では、具体的に意味が類似する語句のコロケーションや、Can I～? Can you～? における動詞のコロケーションなどを、投野（2006）を基に頻度順に表し、授業中の練習方法を示している。また鎌倉（2015）は主に中級レベルの学習者を対象とした語彙のコロケーション分析とそれに基づく指導例を提案しているが、小学校の教科書に掲載されている語句や表現についての言及はされていない。同様のアプローチを小学校の教材に応用することは、小学校の授業で自作の例文を用いる際の指標の策定において有益であると考えられる。

小学校の教材のコロケーション分析を行った研究として、佐藤・秋田谷（2018）は、小学校外国語活動の教材である *Hi, friends!* と中学校検定教科書とを、語彙の観点から比較することで望ましい小中連携の在り方を模索した。その結果、*Hi, friend!* には、現在形を使用した単純な英文が多いこと、児童にとって身近な限られた語彙を繰り返しているなどの特徴が見られた。一方、中学校検定教科書には、現在形に加えて過去形や未来形表現、さらには助動詞に後続する形など多くのバリエーションをもって動詞が使用されていること、前の文に関連したまとまりのある英文が見られることや、名詞節を伴う複雑な構造を伴う形で動詞が用いられていることが分かった。結論として、*Hi, friends!* と中学校検定教科書のそれぞれの特徴を踏まえた指導をすることの必要性を示唆している。しかし、佐藤・秋田谷（2018）は、分析対象のコーパスのデータソースとして、教科化される前の外国語活動で用いられていた教材である *Hi, friends!* を用いており、これと同様の傾向が検定教科書の英文にも見られるかどうかを実際に検証する必要がある。2020年度施行の小学校学習指導要領（文部科学省、2017）におい

ては, went, saw, ate など限定的であるが過去形を用いて, 夏休みの出来事や, 小学校の思い出について扱う活動が行われている。また, 学習指導要領に, 聞くことの目標のひとつとして, 一語一語, 一文一文の理解ではなく, 話されること全体の概要をとらえること, また, 書くことの目標のひとつとして, 英文やまとまりのある文章を参考にして, その中の一部の語, あるいは一文を自分が表現したい内容のものに置き換えて文や文章を書くことができるようにすることと示されており, 小学校の段階からまとまりのある英文が扱われていることなど, この学習指導要領に基づいて作成された小学生用の英語検定教科書において使用されている語彙は, 佐藤・秋田谷 (2018) の研究結果とは異なる可能性がある。

小学校英語で使用されている教科書や教材を分析することは, 小中連携という観点からも非常に重要であるとされている。藤原他 (2010) は小学校英語活動における文法研究について, 中学校と比較すると研究があまり行われていない点を指摘している。小学校英語学習の目的が知識や技能の定着ではなく英語に慣れ親しみ, コミュニケーションへの意欲・関心を育成するという事実が文法研究の少なさの原因であると述べた上で, 中学校の英語学習へ円滑に連結するためには, 直接の目標や評価の対象ではなくとも小学校英語における児童の言語知識, 技能面の理解は不可欠であると述べている。領域ではなく教科として小学校で英語が指導されている現在, 使用されている教材についての分析を行い, その結果を共有することはますます重要となることが予想される。

小学校における外国語の教科化に伴って, 小学生用英語検定教科書を語彙的な側面から分析する研究も行われている。Hoshino (2020) は2020年から小学校の外国語の授業で使用する検定教科書の語彙を共通語 (range) とその特性の観点から分析を行った。その結果, 異なり語数 (type), 総語数 (token) のいずれにおいても出版社によって大きな違いがみられることが明らかになった。また, 7社の検定教科書に共通して現れる語彙 (range = 7) は全体の12%である一方で, 1社にのみ出現する語彙 (range = 1) は42%であり, 小学校の検定教科書に共通して出現する語彙の割合は非常に少ないとしている。さらに, 多くの教科書に多く見られる語彙としては, 児童がそのものを明確にイメージできる具体的なものを指す名詞, cook, eat, jump のような動作動詞, good, great, happy, well などのポジティブな意味の形容詞や副

詞などが挙げられるとしている。

佐藤 (2021) は, 教科としての英語授業において児童が共通して学習すべき語彙のリストを作成することを目的して, 平成29年告示の学習指導要領下で使用される教科書の語彙データからコーパスを作成し, それに含まれる語彙の分析をおこなった。その結果, 検定教科書の異なり語数, 総語数が *Let's Try!* と *We Can!* と比較して大きく増加していること, 各社教科書の異なり語数は学習指導要領に示されている600語から700語を大きく超えていること, そして, 教科書間において異なり語数 (type), 総語数 (token) とともに違いがあることが明らかになった。以上の結果から, 小学校の英語の授業において, 単語ごとにその重要度を判断し, 軽重をつけた語彙指導が必要であるとしている。さらに, このように指導すべき語彙をデータによって客観的に示すことは, 小学校の英語の授業における効率的な語彙指導, およびスムーズな小中連携のための基礎資料となると主張している。

しかし, 小学生用の検定教科書が出版されたのは2020年4月であり, 各出版社の共通語の選定や語彙リストの作成に関する研究は行われているものの, その数は少なく, その分析はまだまだ始まったばかりである。上記の Hoshino (2020) と佐藤 (2021) は語彙自体の分析やリストの作成に関するものであり, それぞれの語彙がどのような語彙と共起するのか, そのコロケーションについて検討した研究はほとんど見られない。特に, 小学校の検定教科書に出現する語彙がどのような語彙と共起するのかその傾向が明らかになれば, 授業で自作の例文を提示する際や, ハンドアウトなどの教材に使用する英文を選ぶ上での, 客観的な指標となることが期待される。

よって, 本研究は令和2年度版小学生用英語検定教科書に現れる英文をデータソースとしてコーパスを構築し, そのコロケーション分析を行うことで, 言語材料として指導される表現に用いられる語彙の共起関係を明らかにし, 小学校で英語を指導する教師が導入などに用いるための自作例文を作成する際の客観的な指標を示すことを目的とするものである。

### 3 リサーチクエスト

本研究では, 令和2年度版小学生用英語検定教科書に現れる英文をデータソースとしてコーパスを構築し, そのコロケーション分析を行うことで, 言語材料として指導される表現に用いられる語彙の共起関係を



明らかにし、小学校で英語を指導する教師が導入や教材を作成する際に用いる例文を自作する際の客観的な指標を示すことを目的とするものである。そのため、以下の2つのリサーチクエスション（RQs）を設定した。

- RQ 1 小学校検定教科書において言語材料を指導する際に高頻度で使用される語彙は何か  
RQ 2 小学校検定教科書において言語材料を指導する際にどのような例文を提示するべきか

## 4 研究方法

### 4.1 分析の対象となる教材

本研究は、2020年度4月から教科として異なる教科書をした授業が行われている小学校の英語の授業において、共通して教科書に出現する言語材料を導入する際の例文を作成するための指標を策定するために、その言語材料を指導する際に用いられる語彙のコロケーションを計量的に明らかにするものである。まず、コーパスを構築するために、以下の7社から出版された検定教科書をデータ化した。

*Blue Sky Elementary*（啓林館）  
*Here We Go!*（光村図書）  
*New Crown Jr.*（三省堂）  
*New Horizon Elementary English Course*（東京書籍）  
*One World Smiles*（教育出版）  
*Junior Sunshine*（開隆堂）  
*Junior Total English*（学校図書）

小学校の教科書には、イラストや写真などが多く、英文とイラストが重なっている箇所や町の風景の中で、店などの看板の文字のようにイラストの形で単語が示されているもの、さらには道路標識の写真の中に文字が示されているものなど、コンピューターのソフトなどで自動で読み取れない形で英語が提示される場合が少なくない。そのため、スキャナーやOptical Character Recognition（OCR）は使用せずに、手作業で書き起こしを行った。

### 4.2 実験手続き

上記4.1に挙げた検定教科書における、各単元のターゲット文におけるコロケーションを考察するにあたって、以下のような手続きを採用した。まず、各出

版社の小学校教科書2学年分（7社×2学年）計14冊に出現する語句をすべてテキストファイル化した。ただし、実際に子どもが目にする語彙を分析対象とするために、以下のものはその対象から除外した。

- (1) 日本語で書かれた指示文の英訳
- (2) CDやデジタル教科書に現れる教師用のスクリプト
- (3) 教科書の登場人物の名前などの固有名詞
- (4) 日本語をローマ字で示したもの
- (5) 教科書巻末についているカードなどの英語
- (6) kmなどの省略された単位

その結果、以下のようなコーパスデータを得た。

表1  
コーパスの基本データ

Type（異なり語数）	2,416語
Token（総語数）	27,868語
TTR（総語数に占める異なり語数の割合）	.088

### 4.3 データ分析

中心語の選定に当たっては、isなどのbe動詞（頻度5位）、like（頻度14位）、go（頻度18位）のような、高頻度ではあるが特定の言語材料や単元に限定されず、共通して使用される語彙やI（頻度1位）やyou（頻度2位）などの機能語ではなく、検定教科書の単元の目標文型として多く使用されている以下の5つの言語材料を分析対象とした。カッコ書で示した数値は佐藤（2021）で開発された『小学生のための重要語リスト1,000』における頻度の順位である。

want（8位）  
what（9位）  
can（11位）  
have（20位）  
who（53位）

whoの頻度順位は53位と必ずしも頻度が高い語ではないものの、Who is your hero?など多くの教科書の単元の中心となる表現として使用されるものであることから分析の対象とした。

本研究は、中心語から右2語を範囲としてコロケーションを集計した。最後にそれぞれの語彙の共起語の頻度上位5語を抽出し、その差異や特徴を比較した。使用したコンコーダンスーはAntConc（Version

3. 5. 9) (Anthony, 2020) である。

## 5 結果と考察

### 5.1 want のコロケーション

表2は want のコロケーションを、頻度別で上位5つを示したものである。

表2

want のコロケーション上位5語

	頻度 (384のうち)	コロケーション
1	317	to
2	93	be
3	66	go
4	35	join
5	24	enjoy

上の表2によると、上位5位のコロケーションは、to, be, go, join, enjoy である事が分かる。最も頻度の高い to のコンコーダンスラインを調べたところ、I want to go to Italy. や I want to go to the zoo. など行きたい場所を述べる表現が多いことが明らかになった。go が頻度第3位として抽出されたことも、これに起因するものである。これは、want to の定着を図るために、行きたい場所を変えて繰り返し練習させる活動が多いため、高頻度で出現すると考えられる。小学校の want to を扱う単位では、行ってみたい国や、県、施設などを伝え合う活動が多い。2番目に頻度の高い be のコンコーダンスを調べたところ、What do you want to be? I want to be ~” のように、将来の夢を伝え合う表現が多かった。将来の夢やなりたい職業を伝え合う活動は、小学校において特徴的な活動であると言えることができる。4番目に頻度の高い join のコンコーダンスラインを調べたところ、What do you want to join? I want to join the soccer club. など、参加したい部活やクラブ活動を述べ合う表現が多いことが明らかになった。

以上から、want to を扱う単位では、go, be, join などの動詞を使用しながら行きたい場所、なりたい職業、参加したい部活、クラブ活動についての例文を意識的に多く提示することで、児童の理解の定着を促す事ができるのではないだろうか。動詞の後の目的語として、児童の興味・関心に応じた場所・職業・部活やクラブなどに関する名詞を選択することもまた重要であろう。さらに、これらの例文を使ったスピーチを児童にさせることを目標とした授業展開も考えられる。

### 5.2 what のコロケーション

表3は what のコロケーションを、頻度別で上位5つを示したものである。

表3

what のコロケーション上位5語

	頻度 (582のうち)	コロケーション
1	185	do
2	122	you
3	35	is
4	29	time
5	20	would

上の表3によると、what のコロケーションとして高頻度に出現する語彙は、do, you, is, time, would である。それぞれの頻度を比較すると What do you do on Sunday? や What club do you want to join? のように一般動詞の疑問文で用いられる do の頻度は185であるのに対し、What is this? What time is it now? のように be 動詞の疑問文として用いられる is の頻度は35であることから、小学校の教科書における what を使用した疑問文の多くは do を伴った一般動詞を用いたものであることが分かる。そこで使用される動詞は、like, want, have, eat, enjoy, do, など多岐にわたる。その反面 is を使用した what の疑問文のコンコーダンスラインを分析した結果、What time is it? と時間を尋ねる表現が10件と最も多く、次に What day is it today? と曜日を尋ねる表現と What is your favorite memory? と思い出を尋ねる表現が5件とその使用範囲は比較的限定的であり、時間を尋ねたり、曜日を尋ねる、思い出を尋ねるなどそれぞれの目的のための決まり文句のようなものとして用いられる傾向にある。これは、頻度上位4位の time のコンコーダンスラインを分析すると、What time is it? と今の時刻を尋ねる表現は29件中9件であり、20件は What time do you get up? または What time do you go to bed? のように一般動詞を使用したものがその大半を占めていることから明らかである。以上から、小学校の what を使用した疑問文は、一般動詞を使用したものの割合が高く、授業で例文として提示する際には、児童の興味・関心や導入する時期などによって、like, want, have, eat, enjoy, do など高頻度の動詞を用いた英文を多くインプットすることが効果的であると考えられる。一方 is を使った例文は時刻を尋ねるときは What time is it? 曜日を尋ねるときは What day is it? であるというように定型表現と

して扱う指導が考えられる。

### 5.3 *can* のコロケーション

表4は *can* コロケーションを、頻度別で上位5つを示したものである。

表4

*can* のコロケーション上位5語

	頻度 (624のうち)	コロケーション
1	39	play
2	35	see
3	21	swim
4	19	eat
5	13	enjoy

上の表4によると、*can* と共起する動詞として頻度が高いものは play, see, swim, eat, enjoy となった。これらの語彙は、児童の日常生活において身近な行為や行動を示すものである。play, see, eat, enjoy については、目的語となる名詞も様々な種類がある。play は、自己紹介、あるいはクラスメイトや家族など周りの人の紹介をする時に使うことが多く、その目的語として使用される語彙はスポーツや楽器の名前となっている。see は、道案内をする活動に多く使われており、35回のうち11回が道案内で使われていた。また、see や enjoy は、ある場所でできることを紹介することにも使われている。具体的には動物園でできることや、様々な国や地域でできることについてなどである。同様に eat も様々な国や地域において何ができるのかを紹介する單元において使用されている。

以上のことから、*can* play というのコロケーションが多数を占めており、自己紹介においてできるスポーツや楽器を伝えるために多く使われていることが分かる。自己紹介の時に、部活や好きなスポーツ、習い事などから、児童が自分で「できること」を連想しやすいような例文を示していると考えられる。一方で *can* が使われる場面は、自己紹介だけでなく、ある場所で何ができるかを表現する場面もあることから、どこかに行ったり自分の地域を紹介したりする場面で、そこで何ができるかを伝えることで相手が行きたいと思えるように工夫した伝え方を身に付けることができると考えられる。自分のことを伝えるだけでなく、その場所で相手ができることについても *can* を用いて伝えることができるように教科書に多くの例文があり、それを用いながらおすすめの場所や自分の町など

を紹介することもできるようになっている。自分のことだけでなく、身の回りのことも紹介できるように *can* を使用していくことが大切であると示唆されている。

### 5.4 *have* のコロケーション

表5は *have* のコロケーションを、頻度別で上位5つを示したものである。

表5

*have* のコロケーション上位5語

	頻度 (252のうち)	コロケーション
1	44	a
2	12	on
3	8	I
4	6	math
5	6	have

上の表5によると、最も頻度の高かった a は、コンコードスラインで確認したところ、We have a library. などの場所を表す可算名詞が多く共起していることに起因するものであった。小学校では自分の住んでいる地域にどんな建物や場所があるのかを考える活動があるためこのような名詞の頻度が高いと考えられる。他にも Do you have a pencil? などのように持ち物や所有物を尋ねる際に使われることが多い。このことから *have* を定着させるために場所を示したり、持ち物を提示したりして学習を行い、その中で1つのものを表すときの a が高頻度で使用されていることがわかる。

次に頻度の高かった on は、"What do you have on Mondays?" などのように、特定の曜日における相手の予定や時間割を尋ねる時に使用されていることがわかった。4位にある math も同様に予定を伝える際に使用されていた。上記の内容をまとめると、*have* は所有を示す時だけでなく場所や予定を表す時にも使用されていることがわかり、小学生の検定教科書において多様な言語活動の場面で活用されていることが明らかになった。以上から教師が例文を自作する際にも小学生だからと、What do you have? と所有物を尋ねたり、紹介することに限定するのではなく、自分の町や行ってみたい場所を紹介する際に、そこにあるものを説明したり、時間割や予定等を紹介する場面で積極的に *have* を用いた例文をインプットしたりすることで、*have* の持つ多様性を小学校の段階から学習者に実感させることが重要であると考えられる。



## 5.5 who のコロケーション

表6は who のコロケーションを、頻度別で上位5つを示したものである。

表6

who のコロケーション上位5語

	頻度 (138のうち)	コロケーション
1	35	is
2	11	this
3	7	your
4	5	you
5	5	hero

初めに、is と this が高頻度であることから “Who is this?” という英文の定着が求めていることがわかる。この表現を用いた活動としては、人物のイラストや写真を指差して “Who is this?” と尋ね、その人物ができることや自分との関係性を説明するものが多く見られた。従って who 単体で指導するのではなく、can や be 動詞といった複数の文法事項と組み合わせた内容を扱う傾向があると言える。

次に3番目に高頻度であった your に関して、これは5番目に頻度の高い hero と結びつけて Who is your hero? という文において多く使用されている。これは多くの教科書に共通する単元であり自分にとって身近な尊敬する人や目標とする人物を紹介する際に使用されている。教科書の例文で登場する身近な人物というのは主に家族、有名人であり、小学生にとって家族や憧れの人物について表現することは興味・関心が持ちやすい活動であると考えられる。また Who is your favorite ~? ではなく Who is your hero? を用いることで対象を限定することなく、例えば父親に憧れているのであれば父親について、将来歌手になりたいのであれば好きな歌手についてなど、本当に自分が憧れている人物について説明することができ、それが英語学習への意欲にも繋がると考える。

最後に4番目に高頻度であった you に関して、これは Who is above you? や Who is below you? Who is in front of you? といった位置を表す表現と共に使用されていた。日常生活において、知らない人物について尋ねる際、例えば「～の前にいるあの女性は誰ですか。」や「～の上に立っている方はどなたですか。」など位置の情報と共に人物について尋ねるという状況は多くあると考える。従って above や below といった位置を表す表現と共に who の学習をすることで、実際に役立つ表現を学ぶことができると考えられる。

## 6 まとめと教育的示唆

本研究は、小学校の英語授業において、導入などに用いるための例文を自作する際の客観的な指標を策定するために、令和2年度版小学生用英語検定教科書に現れる英文をデータソースとしてコーパスのコロケーション分析を行うことで、言語材料として指導される表現に用いられる語彙の共起関係を明らかにすることを目的とするものである。中心語として、選択したものは検定教科書の単元の目標文型として多く使用されている want, what, can, have, who である。その結果、小学校の英語の授業において、who 以外の語彙のコロケーションとして一般動詞が抽出されることが多い傾向が示された。一般的に小学生は英語を学習し始めたばかりであり、使用することができる英文は、What is this? This is my pen. のような表現に限定されるのではないかと考えられがちである。しかし、このような be 動詞を使用した英文は、限定的であり定型表現としての使用にとどまっており、実際には一般動詞を多く用いることで表現の幅を広げ、児童が言いたい事を表現（そのまま）させることをねらっていることが伺える。小学校で使用させることのできる一般動詞は、中学校や高等学校と比較して like, want, have, eat, enjoy, do など数が限られているものの、その後に目的語として使用される名詞と組み合わせることで、多様なことを表現することが可能である。小学校学習指導要領（文部科学省、2017）において言語活動が重要視されている。児童の興味・関心からかけ離れた単純な例文を提示し、機械的な反復練習をするのではなく、教師が児童の実態に合わせて幅広い表現を提示することが、児童の言語活動をより豊かにすることにつながるのではないだろうか。小学校の英語の授業において例文を自作する際にはこれらの点を考慮することで、自作の例文と教科書で学習する英文とを有機的に結び付けることが期待できる。

## 参考文献

- 鎌倉 義士 (2015). 「コロケーションを活用したパターンプラクティス作成と授業計画」『言語と文化：愛知大学語学教育研究室紀要』59巻32号, 121-134.
- 佐藤剛 (2021) 「小学生のための受容語彙リストの開発ー検定教科書から小学生共通の重要語彙を選定するー」『JES Journal』第21巻, 54-69.
- 佐藤剛・秋田谷桃花 (2018). 「Hi, Friends! と中学校の教科書の語彙的比較ー頻度とコロケーションの観点からー」『弘前大学教育学部紀要』第120巻, 111-119.

- 投野由紀夫 (2006). 『投野由紀夫のコーパス超入門—コーパスでわかる英語学習のコツ』.
- 藤原 康弘・仁科 恭徳・松岡 結 (2010). 「小学校外国語活動における品詞・文法へのコーパス言語学的アプローチ」『JACET 中部支部紀要』第8号, 15-32. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110008660961>
- 松宮 新吾 (2013). 「小学校外国語活動担当教員の授業指導不安にかかわる研究—授業指導不安モデルの探求と検証—」『関西外国語大学研究論集』第97巻, 321-338. [info:doi/10.18956/00006097](https://doi.org/10.18956/00006097)
- 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示)』.
- Anthony, L. (2020). AntConc (Version 3.5.9) [Computer Software]. Tokyo, Japan: Waseda University. Available from <https://www.laurenceanthony.net/software>
- Hoshino, Y. (2020). Vocabulary Range and Characteristics of Words Appearing in Elementary School English Textbooks in Japan. *ARELE: Annual Review of English Language Education in Japan*, 31, 49-63. [https://doi.org/10.20581/arele.31.0\\_49](https://doi.org/10.20581/arele.31.0_49)

(2021. 8. 27受理)